



は我々にとつての想像力ですよね。人の人生を描くということは、ただ単にその人生を否定したり肯定したりするだけではなくて、社会性も含めて人ほどのように人としての喜びや悲しみを知るのかということ、ときにドラマ、ときにドキュメンタリーで示すということだと思えます。そして、それを見ていただくかたちが勇気や楽しさ、また同時に悲しみを共有すること、落ち込むときもあるかもしれない、しかし、それも含めて人生だということ。つまり文化創造というのとは人がこの世に限り、人が社会を作る限り、全く別個のものでも不要不急でもなくて、人生において、人間はどこか矛盾のたまものでもあるということ。それを表現することではないでしょうか。ときに障がいを持って言葉が失う、視覚を失うなど、さまざまなことができないかたちたち

ないの」と尋ねても「食えないです」と言われる。そこが一番大きいです。ですからやはり根本的な支えというものを国を軸にして、基礎自治体も含めて考えていただきたいと思えますね。

大木 実際に人が集められないということ、今、ライブ配信という方法でなんと

もこの社会には存在します。それも含めて社会の固有性の中で共有できる社会が、市民生活で求められることなんだろうと思えますね。つまり、それは大和市でも言っている多様性。多様性というのはA型がいてXYZ型がいますよという紋切り型ではないんです。ね。ときとしていろいろなことがダブったり乖離したりする、そういうさまざまな多様な人がいるということを描いていけたらと思えます。簡単に言えばいかに今、目の前の現実と向き合うのか、ということになるかと思えます。

文化芸術の醍醐味

大木 このコロナ禍では、さまざまな社会・経済活動が制限を受けています。音楽や演劇、それから映画もだと思のですが、文化芸術

の活動も非常に大きな打撃を受けているのではないのでしょうか。

崔 私は、文化芸術は不要不急ではないと思っっています。人が日常から非日常へワープするときの娯楽的な意味合いですよ、人の想像力といえますか。このように世界的な感染症流行下で「そんな余裕があるのか」と、否定的に捉えられがちなんです。それは基本的には誤っていると思えます。コロナ禍の中で、苦しみがあつて喜びがあり、喜びがあつて苦しみがあるという体験のただ中に、今我々はいくわけですよ。だからこそ人がものを考え、ものを作るといことが、いかに生きていくうえで大事なのかということだと思えます。日本における文化芸術のありようというのは、コロナ禍で大打撃を受けているわけですね。私たち映画や映像関係はもちろんなん

そこに生で触れることに非常に大きい価値があるのではないのでしょうか。

崔 もちろん我々はAIも

含めて、このテクノロジの中にも人生を半分以上委ねているわけですが、テクノロジというのとはどこか寸止めなんです。だから例えば、人気があるアーティストはライブ配信も数字で見るとうまいく。でも、これから出てくる新人をどう発掘し、どう伸ばすかについて、AIは面倒を見てくれません。対面じゃないとやっぱりだめで、だから寸止めなんです。AIそのものを否定はできないし、ライブ配信も含めて、さまざまなテクノロジが表現そのものを広げてきています。しかし、最後の最後の、触れてエクスタシー、つまり人としての快感を得るのは、やはり、市長がおっしゃったように最終的には同じ空気を同じ場所で吸う

か火をつないでいるという状況もあると思えます。今まではあまり取り組まれてこなかったライブ配信、リモートでの放送など、いろいろありますが、人々を感動させ、人々の力になるという文化芸術の本質的な部分は変わらないのではないかと思えます。しかしながら変わっていくものもあります。文化芸術を取り巻く環境であり、新しいテクノロジです。普及にはまだまだ時間が要だ、少し先のことだと考えられていた、例えばリモートワークなどが、コロナ禍で一気に加速しました。人間が演奏したり、演技したりといった部分は変わらなくても、そこに用いられるテクノロジがすごいスピードで進化しているといえるのではないかと思えます。人工知能AIの進化も目覚ましい現代ですが、文化芸術というものは、やはり生身の人間が生み出すもの、そして、



大和フィルムフェスティバルで講評する崔監督

ですが、実演家やライブハウスもそうです。今若者たちの音楽は昔のようにCDやDVDといった媒体によって成り立つわけではなくて、大きなライブや興行などが日本の娯楽産業、芸能産業を支えているという現実があります。それが全部アウトになってしまっています。だいたい復活してきてはいませんが、まだ根本的な解決はしていません。

というようなことも忘れてはならない、ということだと思ふんですね。そういう意味では我々は今、非常に試されていますよ。

**私たちの未来
テクノロジとの共存**

大木 すごく難しいですね。

例えばデジタル時代というものから本格化していきま。そういつた中でそれについていける人たちと、「いやいやもういいよ」という人たちに分かれていくでしょう。今まで行政が経験したことがないような差が生まれてきます。ですから、前に進むことは非常に重要なんですけれども、大勢いらっしやるデジタルが苦手な人がたにに対しての配慮が非常に重要ではないかと思えます。

崔 そのとおりだと思います。例えばSNSのありよう

文化芸術に携わる、それを職業とする人たちがいかに守るか、いかに守っていたかです。これは何も特殊な職業だから守れということではないんです。普通の市民社会における市民が、当然ながら享受しなければいけない給付や助成など、産業における経済構造の中での支援ということも含めて大きな商人たちを助けるだけではなくて、そうではない人たちも同時に救えるようなことを我々は求めていきたいと思えます。特に文化芸術に携わる者たちに関しては、なるべくハードルが高くない形での助成や給付というものをぜひ継続してお願いしたいです。助成や給付は今もありませんが、現実的にはかなりハードルが高いと感じます。私の周辺でも特に若者たちが見切りをつけて違う仕事に就きたいなどと言ったとき、すごく悲しいんですね。「お前、なんとか頑張れ

というものが世界を変えてしまったのではないかと、一つの疑問が、アメリカから起こっています。それは偏った一つの社会観というものを埋め込み過ぎているのではないかという疑問だと思ふんですね。つまり、テクノロジが進歩すると、テクノロジに依拠して生きるかたも当然あるわけですが、人間にはそうはいかない部分があるようにあります。ですから、その塩梅の判定すらAIに任せようなんていうことになってしまつたら、人間、生まれてくる意味がないみたいになります。例えば、新聞は、紙も電子版も購読しています。じっくり読むときは紙で読み、急いで情報を収集しないといけないときは電子版を見ます。使い分けるしかないんです。今のところ。

大木 やはりAIを中心とし